

現代の神奈川と伝統文化

関東大震災と横浜正金銀行

1923（大正12）年9月1日午前11時58分に関東地方を襲った大地震によって、県内全域は大きな被害を受けました。横浜でも大部分の建物が倒壊しました。地震の揺れに加え、昼食の準備などで火を使用していたため火災が発生し、多くの死傷者がでました。



現在、博物館となっているこの建物は、横浜正金銀行本店として使用されており、倒壊をまぬがれました。しかし、火災によって1階から上の内部が焼失します。かろうじて被災をまぬがれた地下金庫付近に市民や行員300名余りが逃げ込み、命を救われました。

その後、建物は復旧され、戦後も銀行として使われました。この博物館の建物は、大震災と横浜大空襲をくぐりぬけた貴重な明治の証言者なのです。

空襲と国民



戦争末期の1944（昭和19）年ころから、B29爆撃機による日本本土への空襲が始まり、神奈川県では軍の施設や工場だけでなく主要な都市が空襲の標的となりました。1945（昭和20）年5月29日の横浜大空襲では、横浜の中心部は山手地区と山下公園付近をのぞいてほとんどが燃えつきました。

国民は空襲の際、逃げてはならず、焼夷弾に対してはバケツリレー、火たたき、濡れむしろ、砂袋などで消火にあたるよう求められました。消火弾もその一つで、火元に向かって投げたり、中の消火液を水で薄めて使います。防空頭巾は1943（昭和18）年ころから使われるようになりました。

三種の神器

1950年代後半から日本経済は飛躍的な経済成長率を記録し、国民の生活水準は著しく上昇しました。そのため「もはや戦後ではない」などと言われました。

白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫の家電三品目が「三種の神器」と言われました。これらは努力すれば手が届く夢の商品であり、新しい生活の象徴として宣伝されました。



東京オリンピックと神奈川

東京オリンピックが開かれた1964(昭和39)年には新幹線や高速道路などの交通網が整備され、日本の経済発展を世界に印象付けました。

神奈川ではサッカー(三ツ沢蹴球場)、バレーボール(横浜文化体育館)、カヌー(相模湖)のほか、ヨット競技が江の島ヨットハーバーで開催されました。そのヨット競技では強風にあおられて海に転落した他国の選手を、優勝候補だったスウェーデンのキエル兄弟がコースをもどって救出した「人類愛の金メダル」と呼ばれるエピソードが残っています。



道祖神

塞ノ神ともいわれ、村境や道の辻などにまつられ、村の外部から邪霊や病気などが侵入することを防ぐ神として古くから信仰されてきました。

道祖神の形には、一つの像が彫られたもの、二体の像が彫られたものや、「道祖神」の文字が彫られたもの、僧の形をしたものなどがあります。

